さかまた

鴨川シーワールド　NO. 38

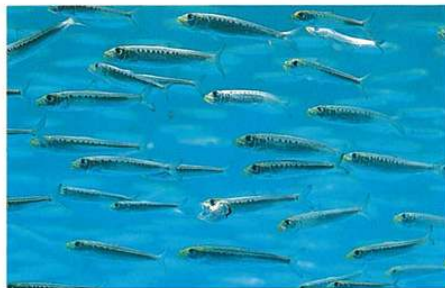
シーワールドのアニマル達

●イワシ

大群をつくるイワシは、水から揚げるとすぐに死んでしまうところから漢字で「鰯」と書きます。また、イワシはカツオやマグロの他にも海鳥や海獣の格好のエサとなり、いつも逃げ回っている弱い魚でもあります。しかし、イワシは大型生物を養うための「海の牧草」の役割を果たしていて、海の食物連鎖の世界では大変重要な魚なのです。

当館では円柱水槽に、マイワシとカタクチイワシの2種類を展示していますが、移動する際にウロコがはがれやすいため、金魚などのように網ですくわず、ビニール袋で水と一緒にていねいにすくうなど取り扱いには特に気をつけています。

イワシは時々口を大きく開けて泳ぎます。この姿を見たお客様の中には、あくびをしていると思われる方もいますが、これはエサとなるプランクトンを泳ぎながら食べる仕草なのです。敵の多い海の中でゆっくりとエサを探すことのできない弱いイワシは、大群で泳ぎながらエサを食べることが、自らの身を守る一つの方法かもしれません。

一糸乱れず群遊するイワシは、まるで牧草が風に吹かれてなびいているように見えます。皆さんも一度、このイワシの群れをご覧下さい。きっと小さなイワシが大きな感動を与えてくれることでしょう。　（満冨）

▲マイワシ *Sardinops melanostictus*
カタクチイワシ *Engraulis japonicus*

●ミズカマキリ

鎌のような前脚、三角形の顔、細い体のミズカマキリは、カマキリによく似たスタイルをしていますが、カマキリとは縁のないタガメやアメンボの仲間（水生カメムシ類）です。ボウフラなどを前脚で捕え、注射針のような口で体液を吸いとりますが、この餌の食べ方はこの仲間の特徴の一つです。尾部先端の長い呼吸管を水面に出し、頭を下に静止している姿は一本の枯枝のようです。羽が乾くとよく飛び、水辺から水辺と移動しますが、当館ではイルカプールに飛びこむあわて者がしばしば見られます。現在展示しているミズカマキリは、イルカ担当のトレーナーに頼んで採集したものがほとんどで、なかにはイルカの口の中から無事生還したものもあり、当館ならではの採集方法といえましょう。採集したミズカマキリには小さな赤いダニが寄生していることが多く、これを一尾ずつピンセットで取り除く作業から飼育がはじまります。餌は生きているアカムシを与えますが、動いていなければ食べてくれません。餌が不足する時には、水溜りのボウフラをあつめて与えています。

鴨川近辺では、まだ彼らの姿を見かけますが他の昆虫同様、今後住み家を失ったり、農薬の犠牲になることも考えられます。産業的な価値はありませんが、いつのまにか姿が見えなくなってしまうことのないよう心から祈りたいものです。（津崎）

▲ミズカマキリ　*Ranatra chinensis*

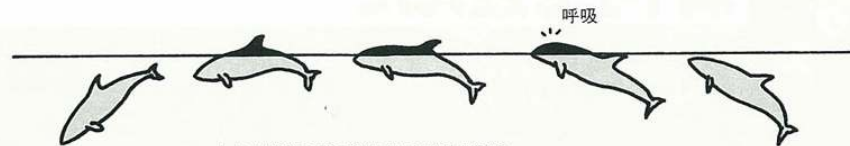
さかまた No.38
（禁無断転載）
編集・発行　鴨川シーワールド
〒296 千葉県鴨川市東町1464－18
☎(04709)2－2121
発行日　平成3年12月

水族館でのホエールウオッチング

▲(上)オーシャンスタジアムでのホエールウオッチング風景　▼(下)シャチの個体識別用写真4態

野鳥に親しむバードウオッチングとならんで、世界各地で盛んにおこなわれるようになってきたものにホエールウオッチングがあります。ホエールウオッチングの醍醐味は、大海での雄大なクジラの姿や豪快な行動を身近に見られることですが、イルカを飼っている水族館でも一頭一頭を見分けられることができれば、イルカ達の行動がより楽しく観察できたり、新しい発見にめぐりあったりする水族館ならではのホエールウオッチングができ、水族館を訪れる楽しみがより大きくふくらむことでしょう。

鴨川シーワールドでは、7月20日より「ホエールウオッチングと正しい観察の仕方」のタイトルで特別展示を開催し、当館で飼育している鯨類の写真とそれぞれの個体識別の仕方を解説したパンフレットを配布し、水族館での新しい動物の観察の仕方としての「水族館でのホエールウオッチング」をおこなってもらうことにしました。

水族館でも海においても個体識別ができれば、ホエールウオッチングをより楽しむことができるはずです。ではクジラやイルカ達の個体識別は、どのようにしておこなうのでしょうか。着目する場所はクジラやイルカ達の種類によって異なりますが、基本的な方法としては、①色（模様を含む）②キズあと（長期にわたってのこるもの）　③体の一部の特徴的な形の三つがあげられます。しかし水中生活者である鯨類は、残念ながら全身を細かく観察することが難しいため、一般的には呼吸時に水面上に現れやすい頭部の一部と背ビレ付近の色やキズあと、および背ビレの形が識別ポイントとなりますが、テレビ等の映像でおなじみのザトウクジラなどのように、尾ビレの形と尾ビレ裏

▲イルカが呼吸する時の動きと水面上に現われる部分

▲ピノキオハウスでのパネル展示

側の模様が識別ポイントとなる種類もあります。

水族館でのホエールウオッチングの楽しさは、比較的容易に誰でも個体識別ができることです。まず、パンフレットに載っているイルカのそれぞれの特徴をしっかりとおぼえた後、プールサイドでイルカ達を観察します。そして頭部の一部や背ビレが水面上に現れた瞬間にイルカの特徴を見分け個体識別をすればよいのです。これは特に高度な専門的知識がなくてもでき、たとえ一度で見分けることができなくても、しばらく待てば近くまで同じイルカがやってきてくれるのが水族館ホエールウオッチングの利点です。個体識別ができたならば、そのイルカの行動を時間をかけて良く観察してみて下さい。愛きょうを振りまいて近づいてきたり、半身にかまえてこちらの様子を伺ったり、ショーの時にトレーナーを困らせたり、それぞれのイルカの性格まで垣間見ることができます。

このように水族館でのホエールウオッチングをしてみると、いつものイルカとは違う多くの新しい発見があることでしょう。そして再度来園した時にもう一度同じイルカを探してみて下さい。前に見た時よりも大きく成長し、素敵なショーを披露していたり、時には仔イルカが一諸に泳いでいることにも出合うかもしれません。また水族館で覚えたこのような楽しみ方は、いつかあなたが大海原でイルカやクジラに出合った時に、その感動を倍増させるために役立ってくれることでしょう。

ホエールウオッチングをやってみようと思った時から、あなたもホエールウオッチャーの仲間入りです。Let's Try! 水族館でのホエールウオッチング。

（岡田）

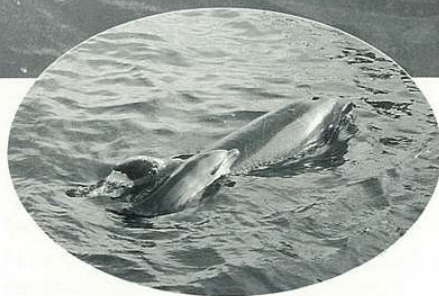
▲水族館でのホエールウオッチング用パンフレット

トピックス

満1才を迎えた バンドウイルカの子ども達

▲親と見まちがえるほど大きくなったヘレンの子（生後約450日）

▲生後、間もないヘレンの子

昨年イルカ飼育プールにおいて6月6日にバンドウイルカの「ノーマ」に子どもが生まれ、6月26日には「スリム」、さらに7月2日には「ヘレン」の子どもが相次いで誕生しました。バンドウイルカの繁殖は、当館以外でも、これまでに多くの例がありますが、３組のイルカの親子を１つのプールで同時に見ることができるのは極めて珍らしいことです。そして今年このバンドウイルカの子ども達は、３頭とも無事に満１才の誕生日を迎えることができました。

日本では、飼育下で生まれたイルカの生存率が低く、特に生後１年以内に死亡するケースが多いため、この１年間は仔イルカ達の体にできる小さなスリ傷一つにも神経を使いました。そんな係員の心配とは裏腹に、元気が良すぎてプールから飛び出したり、突然餌を食べずに母親と泳ぎ去ってしまうなど係員を心配させることもありましたが、大きな病気もせずにここまできました。

◀1日に9kgのシシャモをペロリとたいらげます。

手前よりヘレンの子・ノーマの子・スリムの子（生後約500日）

餌付けは生後６ヶ月を過ぎた昨年の12月からシシャモを使って始めたところ、最初はプールに投げこまれるシシャモに驚いて近寄りませんでしたが、何日かたつと次第に慣れて底に沈んだシシャモを拾い上げてかみつぶしたり、投げ飛ばす遊びを始めるようになりました。そして今年１月に初めて餌を食べたのを確認して以来、食べる量も少しずつ増え、今では１日に約５～９kgの餌を係員の手から直接食べるようになりました。それでもまだまだ甘えん坊の仔イルカ達で、ときどき母親からミルクを貰うことがあります。

▲はじめての健康診断で三頭ともメスであることがわかりました。（生後約400日）

また、出産直後より話題になっていた仔イルカ達の性別は、７月29日に健康診断を行ない調べたところ、３頭ともメスであることがわかりました。この時の体長は、「ノーマ」の子・226cm、「スリム」の子・220cm、「ヘレン」の子・224cmで泳いでいる姿は、一見大人のイルカと間違えるほど成長しています。

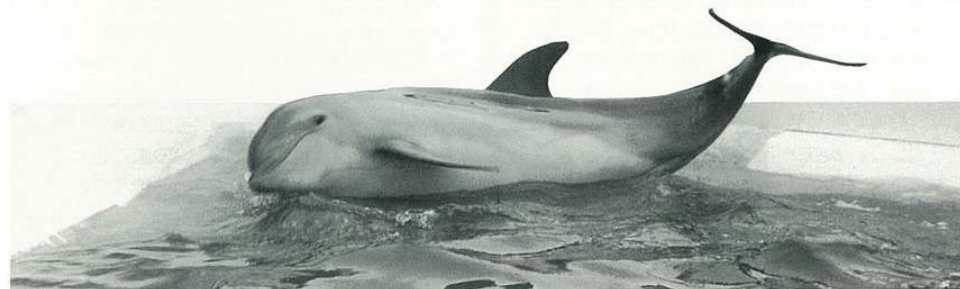
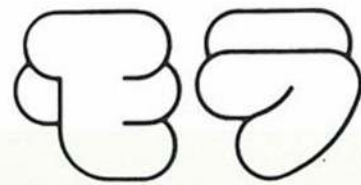
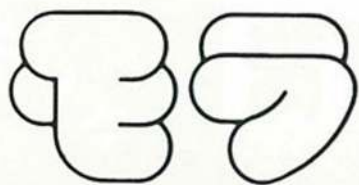
最近の仔イルカ達の行動は、以前は母親と並んで泳ぐ事が多かったのに対し、子ども同士で遊んだり、１頭で泳ぎ回る事が多くなり、だんだんと独立心が生まれてきたような気がします。

こうして１年間観察を続けていると、プールという限られた空間の中でも、仔イルカ達はちゃんと自分達の世界を作って生活していることが感じられます。遊びもバラエティーに富んでいて、仲間同士の追いかけっこや口の中の水飛ばし、突然のハイジャンプ、プールサイドの人に向っての語りかけるような鳴き動作、プールの浅い部分への乗り出しなど人間の子どもにも負けない様々な表情や仕草を見ることができます。

今後の成長が楽しみな３頭の仔イルカ達、それぞれが立派なお母さんになれるよう係員一同これからもしっかりと見守っていくつもりです。

（斉所）

体長測定結果（7月29日測定）

	生年月日	性別	体長(cm)
ノーマの子	1990年６月６日	メス	226
スリムの子	1990年６月26日	メス	220
ヘレンの子	1990年７月２日	メス	224

▲ランディング遊びを覚えたノーマの子（生後約500日）

●海の動物菊花展

11月に入ると各地から菊花展開催の声を聞きますが、当館では、４年前より全国でも唯一と思われる海の動物をモデルにしたユニークな菊花展を開催しています。スタート時にはシャチやマンボウなど７体の動物から始まった菊花展は、今年はセイウチ、ラッコ、ペンギン等を加えて45体となり、また高さ５ｍの灯台や龍宮城など大型の展示物も登場しました。大輪菊の三本養、小菊プランター等を含めて17種類の菊が咲きそろい、華やかな展示となっています。春から行なっている芽摘み、誘引、病害虫の駆除や仕上げ作業などの苦労も、菊につつまれた完成品を見ていると忘れてしまうほどです。今、園内はもう一つのシーワールドの名物ともなった香りの良い海の動物達でにぎわっています。（榎本）

●平成3年度サマースクール報告

今年で19回目を迎えたサマースクールは、延べ10日間、288名の小学生の参加がありました。今回は、「食べる」をテーマに海の動物と私達の生活を比べながら観察を行い、「イルカはエサの魚をどのように食べるのか」、「ハマグリを水槽の中に入れると磯の魚たちはどのような行動を見せるのか」等の実験をしながら、海の動物に触れたり、エサを与えたりと楽しい１日を送りました。ふだんあたりまえのことのように思っていることでも少し注意して観察するといろいろな発見があり、「なぜ？」という疑問からもう一度見直すことの大切さを考えてもらうことができたサマースクールでした。来年は、これまでの内容を振り返りながら、更に充実したサマースクールにしたいと考えています。（津崎）

●深海ガニの展示

太陽の恩恵を受けない深い海の底では、生物が生息する事は困難と考えられていましたが、海底から噴出する熱水に含まれる硫化水素がバクテリアによって有機物に分解され、それらを利用する二枚貝・カニ・エビなどの生物の存在が、深海潜水艇の調査により判ってきました。

今回展示を開始したカニは、海洋科学技術センターの深海調査船「しんかい2000」により、小笠原諸島父島西方の水深486ｍの海底から採集された、甲幅３㎝程のカニです。色が白く、目が退化し、触覚が発達しているなど深海性の特徴を持っています。深海の生物はまだ生態的に不明な点が多く、今後の飼育観察を通して、食性・行動などを明らかにしていきたいと考えています。

（満冨）

●マリンシアター・リニューアルオープン

７月20日にマリンシアターがリニューアルオープンしました。今回のリニューアルは、ショープール前面に水中観察用として備えられていた強化ガラス12枚をサッシと共に取り除き、３枚のアクリルガラスと交換し、より見やすく、開放感のあるプールにすることを目的としました。使用した正面アクリルガラスは、高さ2.4ｍ、幅9.5ｍ、厚さ17㎝で当館で使用しているガラスの中では最大のものです。このリニューアルオープンに合わせて、水中ショーに、昨年ソ連から搬入したベルーガの参加も始まりました。プールの中を一望出来る大きなガラスの前で、優雅に泳ぐベルーガの姿に引きつけられ、いつまでも見つめている御客様が増えてきました。

（佐伯）